



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 60, 1-13
Issue Date	1983-05-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66605
Type	periodical
File Information	yuin60.pdf



[Instructions for use](#)



文化の開花

歯学部教授 飯田正一

デカルトは我々の感覚・知覚・記憶からなる構成物には、絶対的実在である意識・経験と言う主観的世界と、我々が物質世界と呼んでいる客観的構成体とがあると云う二元世界仮説を呈出した。

最近オーストラリアの生理学者エックレスは、これに第三世界を加えた。この世界は客観的意味での知識の世界であって、図書館・博物館あるいはデータベースに集成された形で保存されている。その重要な成分は今日までの人類全体の知的努力の記録と理論体系とであり、一般的には我々が文化遺産と呼んでいるものである。そしてこの第三の世界すなわち人間の創造的努力の結晶が、人間の生活を豊かなものにして来たのであった。

さて文化の発展に関する興味深い実験が、「マンション」マウスと「放浪」マウスの2系統のマウスを用いて行われている。マンションマウスは土と草の堆積物で作られたひな段式のマンションに住んでいた。他方放浪マウスは定住地をもたず、放浪生活を営んでいた。そこでマンションマウスの間で見られる複雑な社会的体制は、文化的に伝承されるものか否かの疑問が生じた。これに答えるため、それぞれの系統から生れたばかりの子供マウスを取り出して、反対の系統の母親マウスに育てさせてみたのである。

その結果この様なマンションマウスは、もはやマンションを建てなくなった。しかし放浪マウスは掘り出したゴミを散らすのに対し、マンションマウスは掘り出したものをきちんと積んで小山を作ったのである。そして15~20世代後には、マンションマウスは完全にマンション文化を再建したのである。

マンション文化を開花させる“原基”となったのは、掘り出した土で小さな丘を作ることであった。複雑な文化の開花は、文化的成果が幾世代にもわたって伝えられた後に初めて出現したのである。

このマンション文化の形成が、マンションマウスの本能によるものであり、それは脳細胞のDNA構造に帰因すると結論されるかも知れない。しかし何世代にもわたる努力によって文化の再開花をもたらせたのは、将来を予測したデザインの成果であり、そのエネルギーは血に依存したものであると考えることも出来る。

現在我々が保有する文化遺産もまた先人の偉大なる意志と、涙ぐましい努力によって作られたものである。このマンションマウスの実験に誤りがなければ、この実験は我々に我々の有

する文化を単に次の世代へ伝承するだけでなく、それによって個性に密着したイメージ化を行わしめ、さらに科学的、芸術的、社会的な広い視野から壮大なデザインを作る様に、活気づけ鼓舞することにより、一段と高い文化の開花へつなげることの重要性を示唆するもののように思える。

◆ 会 議

第111回 図書館委員会

<と き 昭和58年3月26日(土)>
<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和59年度概算要求の基本事項について
2. その他

第73回 教養分館委員会

<と き 昭和57年11月16日(土)>
<と ころ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和57年度学生用図書費の追加配当について
2. その他

第74回 教養分館委員会

<と き 昭和58年2月15日(火)>
<と ころ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和58年度教官指定図書の選定について
2. その他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和57年11月8日(月)>
<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 1983年版外国雑誌の予約について
2. その他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和57年12月22日(水)>
<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 図書業務電算化のための業務処理調査について
2. その他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和58年3月29日(火)>
<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 「図書業務電算化のための業務処理調査」のまとめについて
2. その他

「図書業務機械化ワーキンググループ」第8回委員会概要

期 日 昭和57年11月9日

場 所 附属図書館会議室

1. 経過報告

委員の拡充にともなう自己紹介の後、石川主査より現在までの経過並びに現状について詳細な報告があった。

- ① 文部省は昭和58年度の概算要求新規事項で、北大、東工大、京大の図書館に地域センターとしての電算機（レンタル）を計上した。
- ② 学術情報センターシステムの概況について
- ③ ナショナル・センター（N.C）の構想について
- ④ 地域センター（R.C）の現状について
九大、阪大、名大の状況
- ⑤ 北大における経過報告
第一次答申、ワーキンググループ等について

2. ワーキンググループの今後の進め方について

- ① 第1回～第7回までの見なおし
- ② 他大学の事例研究
- ③ 講習等の実施
 - (1) BASIC 言語講習会及び端末操作
日 時： 11月15～16日及び11月29～30日（1回2日間とする）
対 象： ワーキンググループのメンバーを2班に分けて行なう。
場 所： ソード札幌（株）
 - (2) 図書業務電算処理の現況及び名古屋大学の事例報告（富士通）
日 時： 12月14日
場 所： 時計台ビル内富士通（株）
 - ④ ワーキンググループの班別編成について
受入班： ◎小笠原、嶋崎、高崎、堅田、木下、山口各委員
整理班： ◎小西、井手上、山下、佐々木、藤沢、山田各委員
雑誌班： ◎高橋、黒田、川端、紙屋、岡本、桑野各委員
閲覧班： ◎宇野、杉田、加徳、岡田、福盛田、菊地各委員
◎印は各班のチーフ

以上、報告並びにワーキンググループの今後の活動等について種々質疑応答、意見交換がなされ、全学的な図書業務の機械化について今後の動向を見極めながら進めていくこととした。

「図書業務機械化ワーキンググループ」第9回委員会概要

期 日 昭和58年3月11日

場 所 附属図書館会議室

1. 学術情報システムの進行状況について

昭和58年度を含め、これまで4地区について次のように整備が進められていること。

地 区	地区センター（R.C）	端 末 館
A 北九州	九州大学	九州芸術工科大学 九州工業大学 福岡教育大学（58年度）
B 東 海	名古屋大学	豊橋技術科学大学

- C 南近畿 大阪大学 名古屋工業大学 (58年度)
 D 西東京 東京工業大学 (58年度) 兵庫教育大学 (58年度)

また、東京大学に「文献情報センター(情報図書館学研究センターの改組)」が設置され、59年3月機器導入、同年10月より稼働の予定となっている。これは、目録・所在情報サービスを試行するものであり、学術情報センターの機能と図書館端末を含めてトライしてみるものであると説明があった。

2. 昭和59年度概算要求について

FACOM M160F 電子計算機システム構成図(昭和58年度要求資料)について説明があつて質疑応答が交わされ、昭和59年度要求ではこれよりレベルアップしたもので考えていくこととし、附属図書館(学術情報掛)で原案をまとめることとなった。
3. ワーキンググループ各班の活動状況について

受入、整理、閲覧および雑誌の各班から検討の経過と問題点、今後の進め方などについて報告があつた。
4. 委員会の今後のスケジュールについて

昭和59年度で概算要求が認められた場合を想定した、図書業務電算化スケジュールおよびタイムスケジュールなどについて検討した。
5. 北海道地区国立大学図書館間ネットワークの構築体制について

昭和57年10月21日に臨時の北海道地区国立大学図書館協議会が持たれ、「北海道地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会」とその下部組織として「図書館業務機械化開発専門委員会」が設置され、活動を始めていることの報告があつた。
6. その他講習会等の実施を計画していくことについて説明があつた。

第15回 北海道地区国立大学図書館協議会

くとき 昭和58年4月21日(木)

くところ 北海道大学附属図書館

<協議題>

1. 国立大学図書館間の相互利用(相互貸借)の促進について
2. 第30回国立大学図書館協議会総会について
3. 当面の諸案件に対する地区協議会の意見提出について
4. 次期当番館について
5. 昭和58年度理事の選出および所属部会の決定について
6. 地区連絡館の選出について

また、当日あわせて地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議および地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会(後出)が持たれ、それぞれ当面の問題について協議した。

なお、次期当番館は北見工業大学に、理事は北海道大学および北見工業大学に決定した。

北海道地区国立大学図書館情報処理 ネットワーク協議会が設置される

昭和57年10月21日開催の臨時北海道地区国立大学図書館協議会において、学術情報センターシステムに対応した北海道地区国立大学図書館業務電算処理体制について協議、北海道大学附属図書館を学術情報システムの地域センター館とし、道内各国立大学附属図書館をシステムの構成館とする図書館業務の機械化ネットワークの円滑な形成とその機能の充実を図るため、「北海道地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会」を設置することが決定された。

なお、この協議会には、図書館業務機械化の開発に関し必要な専門的事項を調査検討する「図書館業務機械化開発専門委員会」がおかれ活動を開始している。

北海道地区国立大学図書館情報処理 ネットワーク協議会要項

(趣 旨)

1. 北海道大学附属図書館を学術情報センターシステムの地域センター館とし、道内各国立大学附属図書館をシステムの構成館とする図書館業務の機械化ネットワークの円滑な形成とその機能の充実を図るため、北海道地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組 織)

2. 協議会は、道内各国立大学附属図書館の館長及び事務（部・課）長をもって組織する。
（協議会委員以外の者の出席）
3. 協議会が必要と認めるときは、協議会委員以外の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(専門委員会)

4. 協議会に、図書館業務機械化の開発に関し必要な専門的事項を調査検討するため、図書館業務機械化開発専門委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

専門委員会の委員は、協議会委員及び道内各国立大学附属図書館の実務担当者の中から協議会が委嘱する。

(庶 務)

5. 協議会の庶務は、北海道大学附属図書館事務部において処理する。

(雑 則)

6. この要項に定めるもののほか、必要な事項は、協議会が定める。

附 則

この要項は、昭和57年10月21日から実施する。

◆ 特別寄稿

日米学術図書館の比較

カレン・ベネディクト

カレン・ベネディクトさんは、フルブライト交換教授として本学法学部に招聘された御夫君とともに来日され、昨年5月より本年1月上旬まで本館整理課整理掛において非常勤職員として勤務されました。ベネディクトさんはイリノイ大学でアメリカ文学の修士課程を修められ、さらにメリーランド大学の図書館学修士号を持つ優れた図書館人で、来日前はオハイオ州コロンバスの Nationwide Insurance Co. のアーカイブの専門図書館員として活躍されていました。この間、主としてアーカイブとオートメーションに関する幾かの論文を公表され、またビジネスアーカイブに関する文献の解題書誌を編まれました。本館では、テーマ教授旧蔵の法制史コレクションの16～18世紀刊本の整理を担当され、ラテン語をはじめとする豊かな語学力と目録法に関する該博な知識を披瀝されました。温厚で誠実なお人柄で、ほどなく館員にとけこまれ、言葉の壁を越えて交歓されました。三月には帰国の途につかれ、以前の職場に復帰されている由伺っております。

（整理掛）

A COMPARISON OF AMERICAN AND JAPANESE ACADEMIC LIBRARIES

BY

KAREN BENEDICT

I would like to begin this article with my thanks to Hokkaido University for giving me the opportunity to work in the Central Library. It was a wonderful experience, and I am grateful to all of my colleagues for their kindness and helpfulness to me. In my many months of employment I was able to observe the Japanese university library system at Hokudai and to compare it to the academic libraries I am familiar with in the United States. The following are my observations and my comparisons of our two countries' academic library systems.

In the United States the university library has a role of paramount importance to its institution. The library is central to, it is at the core of, the university's operations. One important aspect by which the quality of a university is judged is by the size and the quality of its library holdings. Both professors and students rely upon the library to provide them with the information necessary for them to fulfill their duties and responsibilities. Professors and students must make constant use of their university library. Students must use the library to study, and to prepare papers and assignments for their classes. Professors depend upon the library for the materials necessary for them to teach, conduct research, and prepare books and articles for publication.

The organization and structure of the typical American university library system is both similar to and different from that I have seen in Japan. It is similar to the system at Hokkaido University in that there is a central library and there are also departmental libraries for the various disciplines; however, it is different in that these departmental libraries are not independent. They are under the same administration as the main library and their cataloging is prepared for them by the same technical processing staff. All administrative decisions are made by the central staff for the library and the same operational rules apply to all libraries. In other words, the central library and the departmental libraries are part of one unified system for the university. The department library staffs serve as reference librarians and have specialized knowledge of the reference materials and the literature in their field. The reference responsibilities of the main library and departmental libraries are most important. It is felt throughout the university that providing reference services for the users is the primary task of the library staff. So, librarians devote themselves to providing the most accurate and complete description of and access to the books and materials in the library. This role makes the librarian important and respected member of the university community.

In American academic libraries the central card catalog, which is housed in the main library, provides information on all of the holdings in the entire library system. Because students and faculty in the United States rely far more upon the university library for their daily business than do their counterparts in Japan. Their use of library materials is facilitated, made easier, by the librarians by the type and quality of the cataloging prepared for each book in the collection. All academic libraries in the United States provide access to their holdings through author, title, and subject cataloging. Author and title cataloging are the basic tools

supplied for the user to locate the books wanted, but the most sophisticated and useful type of cataloging for a research library is subject cataloging. Subject cataloging is essential to enable the user to locate all the possible sources of information on a given topic that can be found in the library's collection. It is impossible to imagine doing intensive research on a subject without having subject access to the books and materials.

I was surprised to find that the Central Library of Hokkaido University now supplies only main entry or author cataloging for its collection. This policy of only main entry cataloging greatly limits the usefulness of the library for the average user; if the user does not know the author's name the book cannot be located in the catalog and will not likely be found by the user. I think that greater use of the library would be encouraged by providing more convenient access to the collection for the faculty and students. It is, of course, less time consuming and therefore less expensive to only catalog by main entry. I can imagine an argument being made that the Dewey Decimal System of classification arranges the books on the shelves according to their topic, and so the user may browse the shelves to find books on the subject for which he is searching. The flaw in this argument is that books are classified for shelving only by a single topic. Thus if a book deals with many different subjects it will be found on the shelf only under one of them—unless the library decides to purchase many copies of the book to file under each subject. Therefore, subject cataloging is needed to provide access to a book on all of its major themes. Only by subject cataloging will users have the fullest access possible to the information found in the library's collection.

In America the rules governing the use of the library apply to all members of the university community; faculty and students alike. Every book purchased by the library must be cataloged and the cataloging information filed in the central card catalog before the book is made available to any user. Professors at American universities do not have the right, as they do in Japan, to keep books in their offices for indefinite periods of time. Faculty do have special status and they may borrow books for a longer period of time than students may, but they must return books to the library if another user has need for the books. The philosophy of the American university library is democratic, all of the legitimate users of the library (faculty, students, and staff) are entitled to the same free access to the books and other materials in the collection, and they must all obey the same rules governing their use. Anyone breaking the rules will be punished by fines or by restriction of their library privileges.

Academic libraries in the United States now stress the use of automation to perform basic library functions. Most academic libraries have automated circulation procedures. Automation of circulation provides in-depth and rapid control of the current location of all books in the library's collection. The computer makes it relatively simple for librarians to keep track of the books which are in circulation so that they can assist patrons in locating needed materials. In the United States there is also an emphasis on using the computer for shared cataloging through such operations as OCLC and RLIN; and on providing bibliographic information for users through the many available commercial data bases.

Librarians in America believe in inter-institutional cooperation. The adoption of shared cataloging, the production of the National Union Catalog, and the establishment of an inter-library loan system are three examples of the types of cooperation being attempted in the United States. The belief that the needs of the user transcend those of the particular institution have led to this concept of cooperation. It has also fostered the belief that the interests and needs of all librarians are closely connected. In the United States there are more oppor-

tunities, through professional organizations like the American Library Association (ALA) and the American Society for Information Scientists (ASIS), for librarians to meet and to discuss their mutual interests. The professional organizations provide for the continuing education of librarians. They provide a forum for the solution of common problems. They encourage institutions and individuals to work together. I may be misinterpreting the situation in Japan because of my inability to speak Japanese, but it seems to me that this spirit of cooperation is not strong among Japanese academic libraries. So, I would like to conclude this article with a paraphrase of Dr. Clark's famous exhortation to the students of Hokkaido University, "Librarians be ambitious!" Strive to improve the quality of the services provided for users. Strive to instill in one another a sense of the importance of your work to the field of education. Strive to work together, to cooperate in the solution of common problems. Strive for international cooperation. Your American colleagues have similar difficulties and can benefit from your experience. If librarians strive to work with one another nationally and internationally we will all be enriched by the shared knowledge.

58.1.11 Karen M. Benedict

資料紹介

昭和 57 年度 全国共同利用外国図書購入費で購入した図書

1. The Epstein Collection on the Foreign Relations of the Soviet Union.

(ソ連の対外関係に関するエプシュタインの蔵書)

エプシュタイン (Fritz T. Epstein) は 1898 年にドイツで生れ、ベルリン大学で博士号をとった後、ドイツ、アメリカで学究生活を送り 1979 年末に死去した。ロシア史 (16 世紀国家行政組織の研究など)、外交史 (1917~20 年の連合国対ソ干渉戦争, 1939~41 年の独ソ関係の研究など)、書誌学 (東独関係文献目録, ロシア, ソビエト史文献目録など) において大きな業績を残した。その蔵書構成は、こうした学問的関心を反映している。主な内容は、(1) 1900 年以降に出版された西欧諸語によるドイツの対東欧政策関係の文献約 1,700 点、とりわけ 1945 年以前にでたドイツ語文献が多く貴重である。(2) 第二次大戦後に出版されたロシア語の外交史関係の文献約 600 点、若干の 1930 年までに出版されたロシア語文献も含まれる。ソ連の地方で出版されたものが多く、大多数は日本の図書館に入っていない。

昭和 57 年度 特別図書購入費で購入した図書

1. Zeitschrift für philosophie und Philosophische Kritik. vormalis Fichte-Ulricische Zeitschrift. (哲学・哲学評論雑誌)

ドイツの有名な哲学雑誌で、フィヒテ (Johann Gottheb Fichte) の息子、ヘルマン・フィヒテ (Immanuel Herman Fichte) による編集および創刊。1847 年以降はウルリヒも共同編集者となる。両者ともヘーゲル哲学に対立し、ライプニッツの有神論的立場をとり、ヘーゲルの一元論とヘルバルトの個人主義との調和を追求する思弁の有神論支持者であった。

2. 初期日本英学資料集成 ① 辞書資料原本 35 点 47 冊, ② 文法資料原本 31 点 46 冊, ③ 音韻・文字資料原本 72 点 78 冊, ④ 単語資料原本 34 点 48 冊, ⑤ 会話書簡資料原本 39 点 50 冊, ⑥ 読本資料原本 19 点 26 冊 (雄松堂・フィルム出版)

日本の初期における「英学」の業績を網羅的かつ系統的に集成すべく、主として幕末維新時代に刊行された図書資料に限って収録してある。これに収録した図書資料のほとんどが、日本英史学会の会員でもある若林正治氏の蔵書によるものであり、これをフィルム版として刊行し実現したものである。

3. 美 学 全 31 卷 (東大美学会)

東大美学会の機関誌で、哲学の主要分野および芸術論に関する内容を掲載している。

4. *Mitteilungen Zeitschrift für Kultur und Geschichte Ostasians. Universität Hamburg, Seminar für Sprache und Kultur Japans, Hamburg.* (日独文化協会紀要)

ハンブルグ大学日本語、日本文化ゼミナールが 1873 年以來行なわれ、東京で刊行してきた紀要である。明治、大正、昭和初期の日本および周辺の極東諸民族の博物学、民族学の精華が盛りこまれている。また本誌は、アイヌ研究に関する論文が貢献度をしめそうとした論文ベルツ・ショイベ、小金井良精の代表的な著作が掲載されている。

5. *Stallbaum, G. Platonis Opera Omnia.* (シュタルバウム編, プラトン全集)

G. Stallbaum 編プラトン全集は注釈つきで、各巻が分冊になり序論、テキスト(ギリシア語原典)、テキストクリティークとなっている。

6. 童 話 復刻版 (岩崎書店)

すでに刊行していた「赤い鳥」と違い若い童話作家、詩人を意識的に育て新人を発掘することに努めた大正期の特色ある雑誌。千葉省三には、「虎ちゃんの日記」、「梅づけの皿」、「ワンワンものがたり」等の代表作、西条八十は抒情的な童話を載せている。後に昭和の児童文学を支えた与田準一、関英雄、柴野民三、浜田広介などが投稿している。

7. 教育時論 復刻第 3 期: 明治 35~40 年

文部省における教育政策の立案過程を示す省内の動勢、およびそれらに対する論評、論争、教育制度、教科訓育の実態報告などである。

8. *Victrian Philanthropy Social Problem.* Ser. 1. pt. 1-3. (教育・社会改良運動資料集成)

第 1 部; シャフツベリー協会、貧民学校連合会の議事録、第 2 部、第 3 部; 貧民学校連合会雑誌

9. 実践国語教育 全 9 卷 教育出版センター (冬至書房新社) 1982

近代国語教育史の研究のうえで優れた実践研究記録の宝庫として第一級の資料である。

10. *Bulletin des Arrêts de la Cour de Cassation Rendus en Matière Criminelle.* 1798-1946. (破棄院刑事判例集)

刑事に関する唯一の公選判例集で、破棄院判決のうち破棄院刑事部で特別の審議をして判例的価値の重要なものを選別して載せているとされている。各判決は、時間的順序で掲載され、各年度毎に通し番号(ヌメロ)が付され、引用の便宜を図っている。

11. *Bank of England. Quarterly Bulletin.* (イングランド銀行四季報)

イギリスの中央銀行の発行する季報。論文および統計。

12. *Bibliothek des Deutschen Museums München. Alphabetischer Katalog.* (Microfiche-Ausgabe) (ミュンヘン・ドイツ博物館蔵書目録(マイクロフィッシュ版))

ドイツ内外を問わず、広く集書され高度な学術書、専門書等科学技術の面で非常に重要な文献が多数収められている。収録タイトルは15世紀から1976年までに出版された書籍で、ドイツ博物館が1931年から1981年3月までに購入したものである。

13. **La mémoire du mouvement ouvrier.** (労働運動の記録) Vol. 1-2. L'égalité (1877-85), Vol. 3-15. Le socialiste (1885-1913), Vol. 16. Le bulletin le socialiste (1913-23).

19世紀後半から20世紀にかけて、大きな影響力をもった、フランスのマルクス主義者の機関紙のコレクション。

14. **Der Wiederaufbau in Europa.** Sondernummer 1-12. Des "Manchester Guardian Commercial" 2 Bde. (ヨーロッパの再建)

第一次大戦後のヨーロッパの経済再建問題に関する英国マンチェスター・ガーディアン紙の特集号のドイツ語版。

15. 満州五箇年計画立案書類 全14巻、付図1巻、覆刻版

鉱工業、鉄鋼、液体燃料、農畜産、資金、労働、交通等の立案書からなる。

16. 全訳世界の歴史教科書シリーズ 全28巻

いわゆる先進国だけでなく、後進国でも実際に使われている歴史教科書を翻訳したシリーズで、大変有意義なものである。

昭和57年度 学部共通図書購入費で購入した図書

1. **Censarship in Tsarist Russia.** IDC. Microfish 59 Titles (〈帝政ロシアの検閲制度〉コレクション)

N. A. エンゲリガルト「ロシアの検閲と印刷の発展の歴史概観」(1703~1903), M. K. レムケ「ニコライ時代の検閲と1826~1855年の文学」「19世紀ロシア検閲史:「文学出版, 印刷所規則」(1859刊)等々17, 18世紀から20世紀初頭に至るまで特に最も検閲の厳しかったニコライ2世治世時代のロシアの検閲に関する諸著作である。また20世紀のロシア検閲史検閲によって禁止された出版物目録なども掲載している。

2. **Инженерный гуд.** 1924-1935 гг (技術労働, 1924~1935年)

ソ連邦労働組合中央評議会の技術者組合連合会の機関誌として1924年から1935年まで発行されたものである。技術労働者の課題、労働条件、生活問題などについて中央と地方の論文・報告が載り、1930年代の資料がとくに少い中で貴重なものである。この時期の技術者、労働者の教育、経済動向、経営問題の歴史的解明にとって欠かせない資料といえる。

3. 厚生省勤労局「**労務動態調査結果報告書**」

労働力の産業移動の動態を把握するためにおこなわれた空前絶後の詳細な調査報告書

4. **Heilbron's Dictionary of Organic Compounds.** 5th ed. 7 vols. (ハイルブロン有機化合物大辞典, 第5版, 全7巻)

有機化合物についての辞典。有機化合物に関する高度の内容をもつ情報が効果的かつ適切に、またコンパクトにまとめられており、研究者や学生にとって使い易い。

5. **レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖手稿** 〈ウインザー城王室図書館〉 岩波書店

世界の科学史、思想史、美術史上に特筆される歴史的資料であり、芸術的遺産であることは言うまでもない。日本語版は、医学、物理学、美術史など諸分野の8人の専門家によって綿密な研究がおこなわれ翻刻・翻訳に完璧を期している。

6. 和鋼風土記 〈岩波映画：昭和45年製作〉

日本古来の製鉄法であるタタラ製鉄は、大正年間に操業は廃止され、その技術は、継承されていない。しかし、この技術は優れたものであるから後世に伝える必要があると考えて、日本鉄鋼協会が古文書によるタタラ製鉄の復元を行った操業の有様を記録したものである。

7. Der Deutschunterricht. (ドイツ語教育)

西独のドイツ語およびドイツ語教育に関する、すぐれた研究誌で、編集・執筆とも著名な語学者・語学教師が参加している。ドイツ語およびドイツ語教育に関して幅広い立場から興味のある充実した論文を掲載している。

8. Book Catalogue of the Library of the Royal Society. 5 vols. (イギリス王立協会蔵書カタログ全5巻) —英国学士院所蔵科学史文献目録—

イギリス王立協会(1660年創設)は、全世界の学会・協会のうち最も古いものであり、ニュートン、ダーウィンほか史上第一級の学者を擁して、理・工・医の諸学をリードしている。同協会が三世紀にわたり蒐集してきた大量の科学古典書(私費出版物を含む)の全カタログが、三年計画による作業の結果ここに始めて刊行された。

学内共同利用逐次刊行物叢書類購入一覧(1982)

資 料 名	配 置 場 所
1. American Historical Review. (+Letters)	附属図書館
2. Beilstein Handbuch der Organischen Chemie.	理 学 部
3. Biological Abstracts.	医学部・水産学部
4. Biological Abstracts. Cumulative Index.	医学部・水産学部
5. Current Contents, Social Behavioral Science.	附属図書館
6. Eiszetalter und Gewalt. DDR	附属図書館
7. European Journal Operational Research. (by Air Cargo)	附属図書館
8. Gesetzblatt der DDR. Teil. I. II.	附属図書館
9. Gmelin Handbuch der Anorganischen Chemie.	理 学 部
10. Journal of Applied Physiology.	附属図書館
11. London Bibliography of the Social Sciences.	附属図書館
12. Psychopharmacologia.	附属図書館
13. Research Quarterly.	附属図書館
14. Synthese; An International Journal Epistemology and Physilosophy of Science.	附属図書館
15. AIIE: Transactions. Transactions of American Institute of Industrial Engineers.	附属図書館
16. United Nations, Publications.	附属図書館
17. Current Digest of the Soviet Press.	附属図書館
18. Archiv für Hydrobiologie.	水 産 学 部
19. Landolt-Börnstein.	触媒研究所
20. 中国研究月報	附属図書館

注) 复印报刊資料(復印報刊資料)は、中華人民共和国で輸出禁止措置がとられ入手不可となる。

◆ 受贈図書

本学教官著作物

〔本館〕

○農学部

黒柳俊雄 (共著) (五十嵐日出夫 (工学部), 飯田勝幸 (工学部), 黒田重雄 (経済学部), 黒柳俊雄 (農学部), 眞野 脩 (経済学部), 三谷鉄夫 (文学部), 斎藤和雄 (医学部) (アルファベット順))
成長都市—その特性分析—(北海道大学ミックス研究会編) [明文書房]

○理学部

松山 義夫 物理化学 [三共出版株式会社]

○法学部

曾野 和明 国際取引法講義 [有斐閣]

○応用電気研究所

木村克美・勝又春次 (訳)
光電子分光法 [学会出版センター]

○低温科学研究所

小林 禎作 雪の結晶—冬のエフェメラル— [北海道大学図書刊行会]
酒井 昭 Plant Cold Hardiness and Freezing Stress—Mechanisms and Crop Implications— Volume 2 [Academic Press]

◇ 人事往来 ◇

○新教養分館長

高田 誠二 (理学部教授) 58. 4. 1

○前教養分館長

佐伯 有清 (文学部教授) 58. 3. 31 (辞職)

○図書館委員会委員

遠藤 丞 (事務局 長) 58. 4. 1

小林 博 (学生部 長) //

佐藤 茂行 (経済学部 教授) //

鈴木 治夫 (理学部 教授) //

高山 一 (理学部 助教授) //

森谷 繁 (教育学部 助教授) //

柏木 秀夫 (言語文化部 教授) //

黒田 登志雄 (低温科学研究所 助教授) //

塩川 洋之 (免疫科学研究所 教授) //

岩田 昌征 (スラブ研究センター 教授) //

○配置換・転任

佐藤 繁好 整理課長 (国立婦人教育会館情報交流課長) 57. 12. 1

高砂 慶 閲覧課学術情報掛長 (小樽商科大学附属図書館整理係長) 58. 4. 1

田村 和洋 整理課会計掛 (工学部経理課営繕掛) //

石倉 賢一 東京大学附属図書館閲覧課参考掛長 (閲覧課学術情報掛長) //

桑原 蔚 室蘭工業大学附属図書館整理係長 (閲覧課閲覧掛) //

加藤 義久 医学部附属病院管理課照査掛主任 (整理課会計掛) //

桑野勇次	整理課受入掛 (大学院環境科研図書室)	58. 5. 1
佐々木光子	閲覽課参考調査掛 (文学部図書掛)	〃
鈴木國夫	〃 教養分館閲覽掛 (経済学部図書掛)	〃
岩本攻	整理課整理掛 (閲覽課参考調査掛)	〃
小山千恵子	〃 教養分館整理掛 (〃)	〃
清水弘	閲覽課閲覽掛 (整理課受入掛)	〃
小西和信	〃 参考調査掛 (〃整理掛)	〃
片桐和子	文学部図書掛 (閲覽課教養分館閲覽掛)	〃
鎌田由紀子	理学部 〃 (整理課教養分館整理掛)	〃
横山彰一	工学部総務課図書掛 (〃 会計掛)	〃
○探 用		
斎藤恵子	整理課整理掛	58. 1. 17
佐藤享子	整理課教養分館整理掛	58. 3. 1
岡田知子	閲覽課閲覽掛	58. 4. 1
高橋真弓	閲覽課教養分館閲覽掛	〃
林田敏江	〃	〃
○退 職		
松澤聖子	(整理課整理掛)	57. 11. 30
宮部徹	(整理課長)	57. 12. 1
高根澤由美	(整理課教養分館整理掛)	58. 1. 31
谷口真裕美	(閲覽課教養分館閲覽掛)	58. 2. 28
仲倉由美子	(閲覽課閲覽掛)	58. 3. 31
中村美幸	(閲覽課教養分館閲覽掛)	〃

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻60号)

1983年5月10日発行 発行人 平 清 二

編集委員 佐藤繁好(長)・石川雅夫・遠藤雄作・石黒克介・成田 稔・嶋崎 功・杉尾勝茂
山本幾夫・黒田泰行・庄司重陽・遠 昭二・宇野弘純・高砂 慶・星賀 隆

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 711-2111 (2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561